

六花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada

cover designed by masami

7月号

貫
山田六甲

天道虫残し牡丹の散りにけり
霞より湿り移れる一樹かな
幾たびも幾つもの岐路麦畑
墨を磨る頭より蟻落ちて来し
竹藪へ灯へ向かひゆく螢かな
夜深く川音高く螢かな
草むらの向うの川を夕螢
逃げながら糞を落とせる毛虫かな
枇杷の種喉を通りてゆきにけり
とも綱の蠅いつせいに散りにけり

幾周も湯呑の縁ふちを辿たどる蠅
串先を蠅のなんなく飛び立てり
睦むつみ合ふ厨くりやの蠅を叩きけり
蠅と蠅頭触るるや飛び分かる
曇りある水屋に蠅の生まれけり
緑濃し水車零こぼるる水までも
若鮎わさの食はみたる苔こけの輝けり
水よけるごとくに鮎の泳ぐかな
纜ともつなのゆるみては張る梅雨つらいり入かな
黒南風くろはえや沖よりもどり来る雀

ことり

滝壺へ近づきゆける日傘かな
てのひらに震へてをりぬ沙羅の花
白妙しろたえの夏蝶川へ影散らす
滝風に日傘飛ばされゆきにけり
若葉風を滑らせてゐる湖面かな
水紋の重なりに乗りあめんぼう
うつむきて夏の潮騒しおさい聴きゐたる
合ね飲むの花含み笑ひの色なりき
群鷺むれさぎの一羽飛び立つ青田かな
鷺の群青田の畦に並びをり
鴉からすゆく青田の隙間縫ぬひながら

しなりつつ裏返りつつ蓮の風
火ほ照てる身に触るる君の手涼しかり
二尺ほど残し巻き上ぐ葭よす簾だれ
地に近き程に蕃茄とまとのものがれ色
雨が打つ蛭袋の白きこと
羅うすものに五月雨の糸重なりぬ
雨に羽はねうち広げゐる川鶺うかな
風鈴を聴きながら爪切つてをり
夏の夜の虫の声こそ淋しけれ
羅の木下闇へと消えゆけり

橋桁はしげたの影耕かげこうしてをりにけり

笹村 政子

耕こうじん 人の口尖とがらして軍手脱ぐ

泉源せんげんの櫓やぐらかすめる夏つばめ

鯉こいのぼり幟尾のぼりの先までを山の風

石風呂いわぶろの孔あなを詰めたる春落葉

あえて説明する必要もあるまいが、散文ならば太陽によって橋桁の影が出来ている田畑の土を耕していると言うところを思い切りよく省いた。特異な場所のことや太陽の位置（時間帯）、橋の大きさなども語らず、大胆に省略できるのは読者を信じているからこそである。このような省略による内容の凝縮こそ俳句の真骨頂也。

産声聞かむ梅が香の道ひた走る 岩松 八重

春雪に留めおきたし足の跡

花ふふむ吾妻小富士に雪うさぎ

通学路子に教へ込む花の下

入学すすべて桜の中のこと

まず「産声を聞かなければいけない」と結論を述べ、その後駆けつける場面をもって来た。その緊迫した気持ちのなかにも梅の香りがしているという場違いな余裕が重なっているのも不思議なことだ。自然に対し人はそういう性を本来持っているのかも知れない。上七の破調が切迫した状況をよく表している。

花林檎

貝森光洋

花林檎 白い岩木となつて
 うららかに母体なるもの膨らめり
 寝尽くして人間尽くして春の屋
 朝寝する目覚し時計を揺すりけり
 耳搔きの春の囁き妻の膝

屋根

梶浦玲良子

片方のパンプス探す揚ひばり
 すんなりと割り勘リラの花盛り
 割り箸で占ふ遊び春ごたつ
 仏彫る背なの鳴咽や別れ霜
 東風甘し少女に屋根へ上がる癖

雪樹集

春 香 岩松八重

春雪しゅんせつに留とどめおきたし足の跡
産声聞かむ梅が香の道ひた走る
花ふふむ吾妻あづまこふじ小富士に雪うさぎ
通学路子に教へ込む花の下
入学すすべて桜の中のこと

春の水 池崎るり子

春の川小枝走りてゆきにけり
春の川湧き水へ藻もの追ひ込まる
保津川の岩打ついかだ筏春の水
あたたかや墓地より望む白き船
振袖に紺の袴や卒業す

黒鳥 K O K I A

残り花お菊の井戸にかぶさりぬ
うららかや帽子はずさずみる仏
春の川自転車沈みをりにけり
行春こうしゅんやカメラ目線となれる嬰や
黒鳥の春風受けて泳ぎをり

六花集

六甲選

金月 洋子

ゆるゆると流るる吾子の雛かな

連翹の枝に燃え咲きをりにけり

潮風や干せる若布の香りたる

雪柳水面に筏組みぬたる

潮風の流れて来たる梅見かな

永田 勇

春水の巖磨きてゆきにけり

散る花のひとひら酒に浮かべけり

飛花落花風吹くたびに子等の追ふ

跳ねる子の捕へきれざる花吹雪

幼子の漕げるボートや花吹雪